

中 等 教 科  
新 編 習 字 帖

成 瀨 大 域 書

森 岡 書 店 發 行

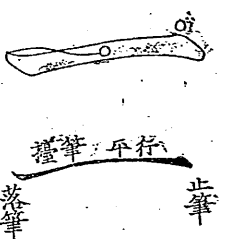
K2222

2

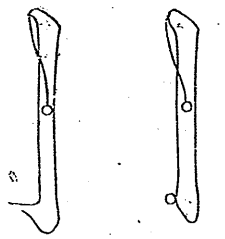
# 永字八法用筆略解



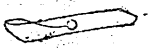
側 ○より筆鋒を空画し尖處に至りて筆を落し直ち頓挫して右に轉し又斜に下りて筆鋒点の中心に至り時左下不挑出を



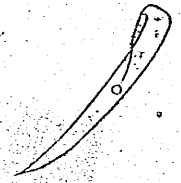
勒 少しく仰鋒にて○より空画尖處に至り徐ろに頓挫して上方に向ひ半ばより平行し○にて鋒を挫き左へ放還す則ち側を延べたるか如し



弩 左鋒より○より空画す則ち勒を豎して裏面より見たる小同し



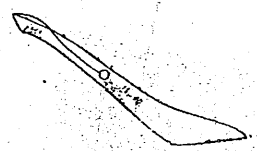
趯 鋒を尖處に挫き正鋒を以て引下し少しく左下へ斜に廻轉して奔然挑出ま可し



掠 左鋒にて○より空画し鋒を尖處より右へ挫き斜に左へ利し出す可し



啄 掠法に同し  
右鋒にて少しく仰き○より空画落筆して僅うに平行一折して右下に引き一折止まらむとして止まらず起伏遲澁の間に又一折し開窄拔出して左へ還す

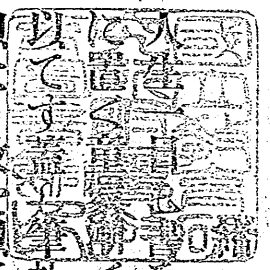




磔

右鋒より少く仰きにより空画落筆して僅うに平行一折して右下より引き一折止まらむとして止まらず起伏遅滞の間に又一折開窄抜出して左へ還す

言



入道一書と書なかる可らず是を以てか古來之を教育の第一義に置くは、其の事を知るに至れば先づ之に授くるに文字を以てす蓋し筆札と記誦とは人道の始めにして又其靈長たる所以なり故を以て人皆之を學はざるなし然れども其法を得ずんは多年屹々として刻苦するも終に徒爲たらんのみ苟も能く之を得て學は、義獻の堂と雖も窺ひ難しとせざるなり命や文運昌盛を極め教化の具備はらざるなく牧童漁兒に至る迄皆能く文字を知る然れども獨書法に至つては漸く世と共に下りて上流の貴紳と雖も拙劣見るに堪へずして其品格を傷ふ者比々皆然り中學の令布かれて已に久しく百科の學粗完備せりと雖も習字の一科に至つては混沌として有れども無きか如く其教授の法に於ても贖焉味焉劃一の良法に乏しく人に依て其法を殊にし多くは徒らに近代書家の筆に就て臨習せしむるに止まる書法に至ては敢て之を辯説する者なし従つて生徒の輕侮を招かむとす然るに教育の任にある者往々之を等閑に付するは何ぞや書は果して學ふに足らざるか將た學ふに良法あらざるか若し斯の如くにして推移せば則ち十年を出すして日用往復の書は勿論己の姓名をも優に書し得る者なきに至らん事必せり是豈嘆す可きにあらずや予拙陋自ら揣らす斯道の爲め書法の正しきを以て聞えある大域成瀬温氏に乞ひて聊か此篇を修し以て中學教育に資せんとす舉實に倉卒に出て固より缺點の多きを免かれず幸に教育家諸君の示教を待て漸次完全の域に進ましめんとを期す

## 編成要旨及修學注意

一本書は専ら中等教科の目的を以て編成し、前篇六卷より漸次楷行脚三体の小字を學ばしめんとす、故に尋常中學校師範學校高等女學校は勿論、高等小學の補習科若しくは小學教育を終りたる者にして猶斯道を修めんと欲する者之に依て學は、益する所少からざるべし

一筆勢の磊落健豪なる如き一見妙趣多きと似たるを以て初學往々好んで其弊を學び奇癖亂雜醜態見ると忍びざる者多し本書は字々正格筆々謹慎誠に中學習字科の最良教科書ならん事を期する者なり

一本書第壹卷を楷書の御制和歌及教育勅語とし第二卷を行書の格言及韓文公符讀書城南とし第三卷を平假名交りの書翰文として脚体の應用を學ばしむ其擇ふ所聊か學生風教の助けとならんことを努む學者一字一句筆を下すも苟もせずんば單に書道を知るのみに止らざるべし

一指行草三卷各壹卷を以て毎壹學期に充つ然れども中學習字科の僅少なる時間能く斯道を窺ひ得べきおあらず別に家庭に於て充分に練習せんと必要なり又已に練習せし文字を時々臨本を去つて白紙を試みん事を切望す

一凡そ漢字の數幾萬を以て數ふ可く其形亦千貌萬狀なりと雖も尤も主要なる原則の七十二として之を種々又連結配合したる者に外ならず而して更ニ其源を尋ねれば僅か永字の分解八割に歸す因て前編已に若干の必要なる原則と其變化應用とを學ばしめたり故に本書再び之を説かず學者須く先づ前編に就いて之を學び然して後此編に入るべし

一紙の白うして厚く滑かにして堅韌なるを佳とす硯の石質密にして硬く寬ふして能く黒色を發するを良とす用ひたる後は能く洗滌す可し

一墨の黒くして光りあるを撰ひ徐か磨りて濃きに至るを要す若し磨ると急劇なれば墨汁粗惡よし其色煥發せざればなり磨墨の後暫らく放置し硯面の燥くを俟ちて用ゆるを可とす

一筆の毫毛健よしして圓く長くして尖りたるを撰ふ可

し使用の法一寸の筆頭にして其五六分を搦き能く墨汁を含ませしめて徐ろ運べば紙墨相和し清麗温然として見るべし凡ろ大小の筆此の如くす其用ゐたる後の必らず能く之を洗ひ清めて丁寧お藏む可し

一執筆の法大字は提腕中字は懸腕小字は枕腕とす提腕とい腕を空中に提ぐる者にして懸腕とは狼りに臂を張るの謂にあらす手腕紙上を離るゝ凡そ一寸臂の僅に机面を接せざるを以て度とし畢竟手腕の導送は便なるを要す

一筆頭は筆管と一樣に直なる方を表とし少しく張りて圓なる方を裏とす楷行には垂直にして少しく左上に向らしめ草書には少しく左に向はしむ

一指行の筆頭を去ると二寸師書の三寸にして大指の頭と食指の第一關節とを以て堅く之を執り深く中指を釣けて少しく筆を前に掣くが如くし無名指の筆を爪肉の際につけて上より掲げ小指を添へて力を強くす可し

一心正しければ筆正しく筆正しければ字も亦正しかる可し凡そ字を寫さんと欲して已に筆を執る先づ氣力を静め姿勢を正し腰脚腕脂總て力を充たし荷も放心す可からず

一首を正して胸を開き脚を開きて腰を据へ左手を机上の左方安置し右手を胸前に伸べて筆管を正しく鼻梁に向けて把り眼は常に筆頭に注ぐ可し

一字を寫すには十運五急を貴ふ筆を落すや釘聲謹肅筆を運ぶや細心緩行荷もすべからず殊に楷書にありて用筆緩舒ならざれば自ら法則を失ふ可し

一中書あるの字には堅書を間と云ひ横書を架と云ふ中書なき字には堅書を結と云ひ横書を構と云ふ一点一劃間架あり結構あり約言せば間架は鈞合にして結構は粗立なり之を家に例へんか棟梁柱礎正しく其權衡を得ざれば暫くも立つ能はず猶ほ人の体格に置ける如し其正を失へば畸形不具見る可からざる也學者尤も留心す可し

書





者

次

際

際

重

重

寸

寸

陰

陰








心

心





















家

一

蟻

一

為

馬

前

率

鞭

背

生

蟲

蛆

卷一

卷一

為公

與

相

潭

潭

府

中

居

間

之

一





























中等新編習字帖續編卷之壹(楷書)

教科 御製 述懷

古乃文見留度爾於母富加奈己我治武流  
久珥波伊可仁止

皇后陛下御製 慎獨

獨讓美思布心廻善惡手照志和苦良牟天  
地之神

教育勅語

朕惟我皇祖皇宗率國宏遠樹德深厚我臣  
民克忠克孝億兆一心而世濟厥美此我國  
體之精華而教育之淵源亦實存于此爾臣  
民孝於父母友於兄弟夫婦相和朋友相信  
恭儉持己博愛及衆修學習業以啓發智能  
成就德器進廣公益開世務常重國憲遵國  
法一旦緩急義勇奉公可以扶翼天壤無窮  
之皇運矣如是則不獨朕忠良臣民又足以  
顯彰祖先遺風斯道也實我皇祖皇宗之遺  
訓爾子孫臣民之所可俱遵守也通之古今  
而不謬施之中外而不悖朕庶幾與爾臣民  
俱拳々服膺而履其一其德

全第二卷 (行書)

君子慎所交不費尺璧重寸陰無遠慮者必  
有近憂

符讀書城南 韓退之

木之就規矩在梓匠輪輿人之能爲人由腹  
有詩書詩書勤乃有不勤腹空虛欲知學之  
力賢愚同一初由其不能學所入遠異固爾  
家各生子提孩巧相如少長聚嬉戲不殊同  
隊魚年至十二三頭角稍相踈二十漸乖張

明治三十年三月廿五日印刷



編輯者 森 成 眞  
印刷者 森 成 眞  
發行者 森 成 眞

眞野紀太郎  
東京市牛込區富久町九十九番地  
成瀬大城  
東京市下谷區上根岸六拾番地  
森 成 眞  
福岡市博多中島町五拾九番地  
森 成 眞  
福岡市博多中島町

定價 自一之卷各金拾五錢  
至三之卷各金拾五錢

清溝映汗渠三十骨幣成乃一龍一豹飛黃  
騰踏去不能顯蟾蜍一爲馬前卒鞭背生蟲  
蛆一爲公與相潭潭府中居問之何困爾學  
與不學歟金壁雖重實費用難貯儲學問藏  
之身身在則有餘君子與小人不察父母且  
不見公與相起身自率鋤不見三公後寒饑  
出無驢文章豈不貴經訓乃當禽潘潦無根  
源朝滿夕已除人不通古今馬牛而襟裾行  
身陷不義况豈多名譽時秋積雨露新涼入  
郊墟燈火稍可親簡編可卷舒豈不且夕念  
爲爾借居讀恩義有相春作詩酌躊躇

中等第三卷 (章書)

今日も種々さまざま内談可申儀數多候御した、ゆは是に  
て御りされ候様御出可有候 毛利元就  
御手紙被成下謹て奉拜見候ハ尋可被成御用の儀御座候間  
早々貴宅まで参上可仕旨畏奉存候追付参上仕候以上  
山鹿甚五右衛門  
今晚俳諧御催之之處傘無之候間まいられず候連中へもよ  
ろしく頼入候 松尾桃青

堪忍は身を守る第壹に候何事の懲衛す堪忍なくしては致  
去覺之候事もならぬ者にと候賞罰を正しくいたし疎きを  
も悪み近きをも罰す是仁の堪忍なり君に仕へて身命を顧  
みず一度も約を違へず是義の堪忍也人の事を先にして身  
の事を後にし起るよりねる遊行儀を正しくするこれ禮の  
堪忍なり我に慢して人をないうしろにする事をせず是智  
の堪忍なり君父に仕ふるに始め初めにも表裏難薄を不  
爲是信の堪忍也堪忍のなる事は十全に至らねば家をも國  
をも起す事いならぬものなりたとへ十の内をば九守り一  
二破候へは破れし所にて夫れまての堪忍は徒らに成行も  
のにて候 徳川家康

朋友會合之際は言語の上緊要にて候朋友互に益を求め仁  
を輔くるためなり然るを無益の雑話に時を費すは益なく  
去て損あるへし雑話の上より自然不遜にもなり争論をか  
こす事よも及候加減之儀一切無之様心かけらるべく候  
佐藤一齋

